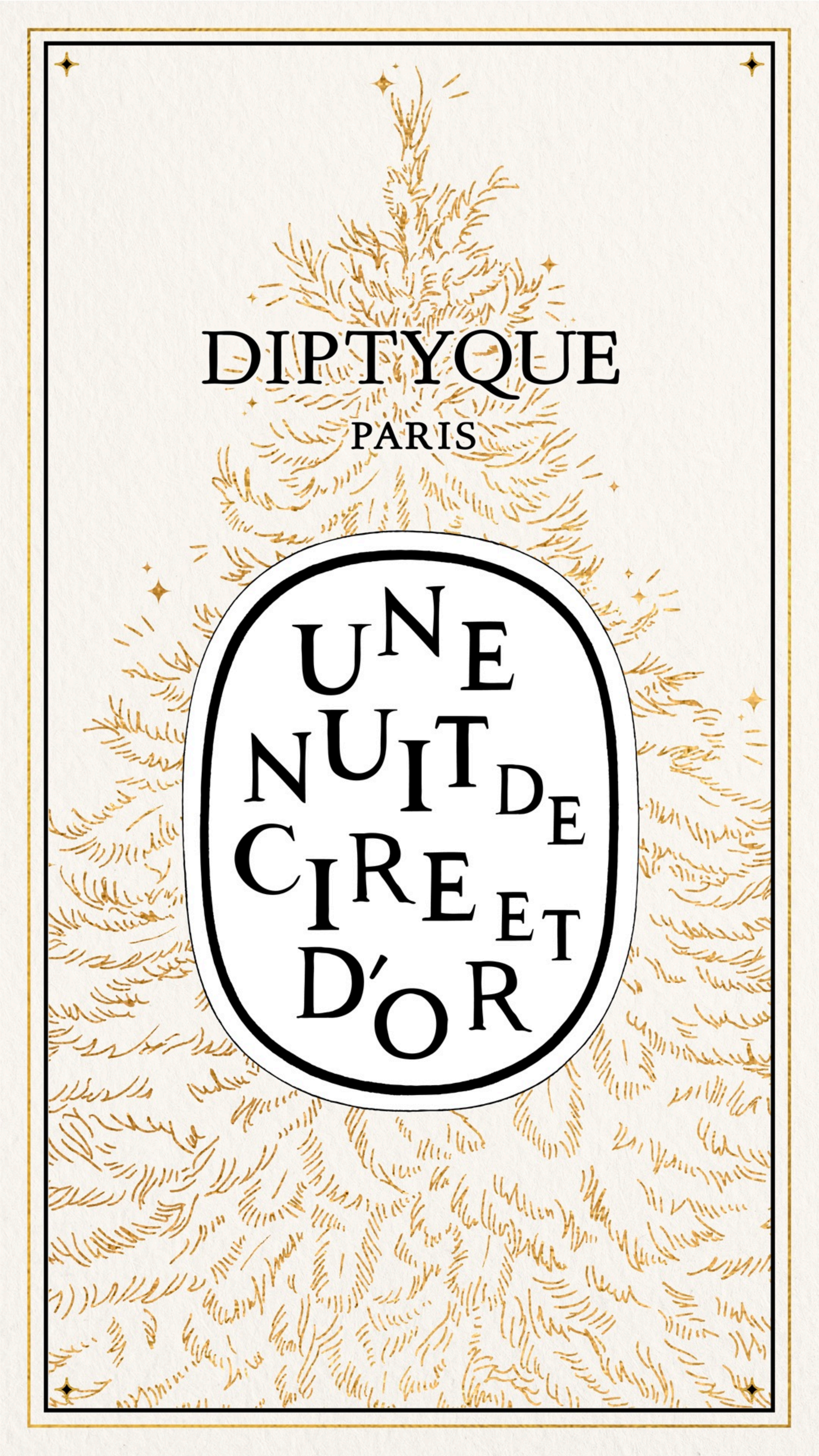




DIPTYQUE
PARIS

UNE
NUIT DE
CIRE ET
D'OR

第1章

壮大な冒険は、前触れなく始まる時がある。
冒険のチャンスを手中に収めるには、そのかすかな兆しを捉える特殊な「目」、あるいは注意深い「手」が必要だ。そんな冒険が、まさに始まろうとしている。
冒険の扉の前に立っている今、目をしっかりと見開き、手を大きく伸ばして、共に冒険に出ようではないか。

ある日の朝、レオンは自らの書店を開ける準備をしていた。まだ眠気が残っている状態でガラスの扉のロックに鍵を差し込み、配達員が急いで置いていったと思われる本が入った段ボール、投げ込まれた広告チラシ、郵便受けに入らないサイズの封筒を拾うというのが、毎朝のルーティーン。ただ、この日の朝は、いつもの朝ではなかった。

入口のドアマットの上には何も置いて無く、小さな松ぼっくりが彼の到着を待っていたかのように置かれていた。レオンは腰を曲げ、無意識に松ぼっくりを拾った。

子供の頃、森を散策している途中に何百回と松ぼっくりを拾ったことを思い出した。松ぼっくりを指で撫でながら、鱗片のごつごつした感触を手のひらで懐かしむと同時に、ここは森の端ではなく、パリ中心部のサン・ジェルマン大通りだということを、思わず忘れてしまう。無論、これが過去に読み聞かせてもらったどの絵本よりも、魔法に満ちた物語の始まりの兆しであることにも気付かなかった。

その日の朝、レオンはこのような想像に浸ることなく、松ぼっくりを拾い、彼の書店に飾られているクリスマスツリーに飾った。そしていつものようにコーヒーを淹れ1日の始まりを迎えた。

いつものように、レオンはパリ5区に位置するパリ植物園を歩いて書店にやってきた。風に揺れる大きな落葉した木々の下をのんびりと歩き、周囲の物や人に目を向けながら、冬の夜から目覚めた肌寒い都市を五感で



感じることに幸せを感じながら、目覚めていく。

いつものように豪華なジャングルの温室に沿って歩き、紺の制服を着た、厳格な表情の管理人の前を通り過ぎ園内の道をスピードに乗ってジョギングする、蛍光色のウェアを来たランナーたちを眺め、パリ自然史博物館の窓から外を眺める恐竜たちに挨拶をし、学校の終業式へと急ぐ親子、そしてぎりぎりでプレゼントやデザート、サプライズでパーティに持ち寄るパンなどを探しているような人々とすれ違った。道を行く人々は昨晚よりもさらに、大きなイベントに特有なワクワク感と軽やかさに満ち溢れているようだ。パリの上空にマイクを置いたなら、祝祭の準備に伴う忙しなく、明るい騒音が鳴り響くだろう。通り沿いのイルミネーションには白色と黄色の光がチカチカと点灯し、ホリデーシーズンが本格的に始動していることを示していた。

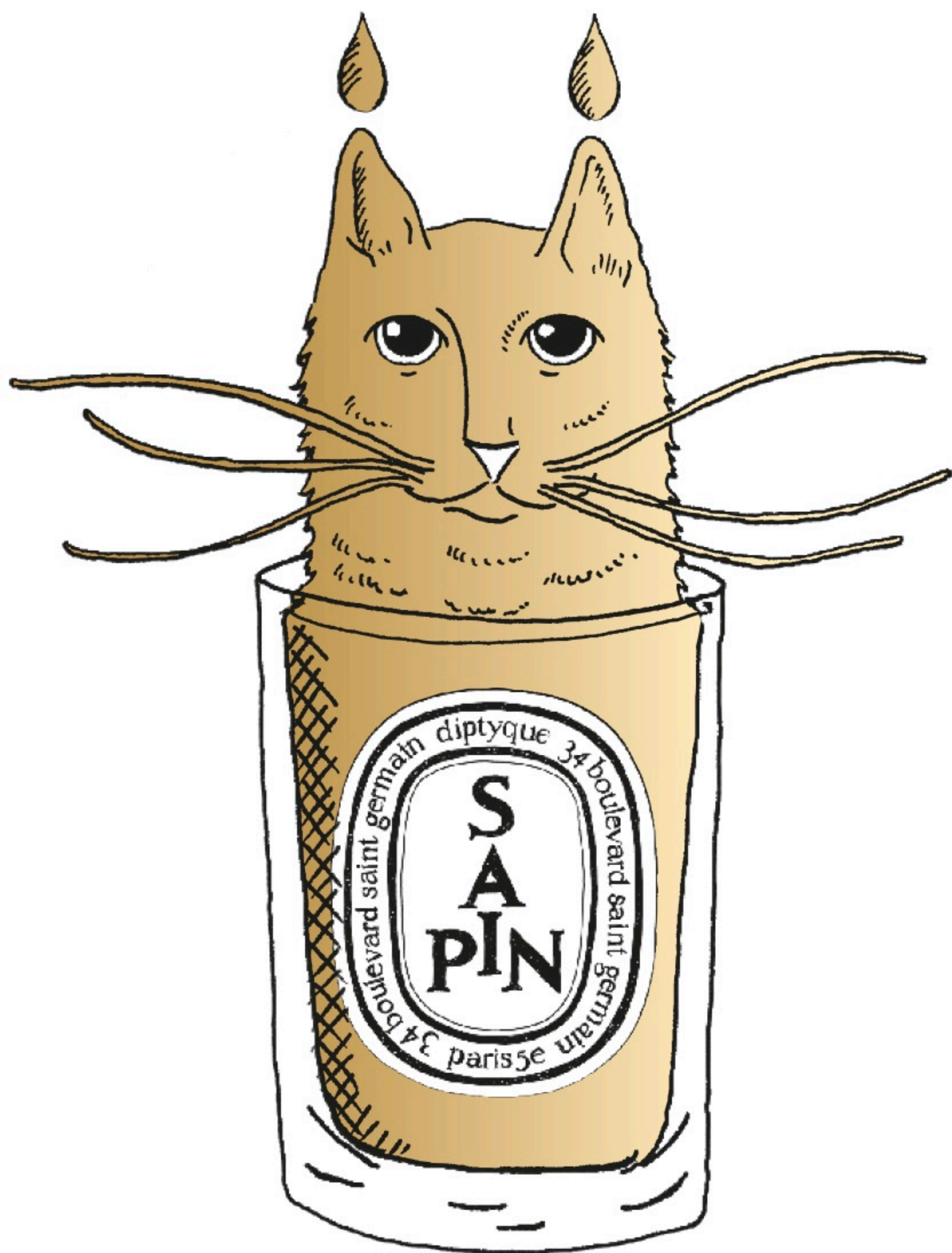
レオンもまた、この喜びに満ちた喧騒とは無縁ではいられなかった。書店にて、口笛を吹きながらオーク材のカウンターに置かれたフレグランスキャンドルに火を灯し、大きな梯子に上って、今朝到着した、飴のように痛烈な大きな絵本、感傷がたっぷり上塗りされた恋愛

小説、光沢のあるページが綴じられたアート本を棚に整理して並べる。整理が終わると梯子を下り、ディスプレイウィンドウのアレンジを行い、ツリーに飾られたキラキラ光る飾りの位置を数センチほど左にずらし、開店の準備は完了した。ひとたび開店すると、多くの人が店内に入り、このホリデーシーズン特有の「お祭り気分」というカオスが再びやってくる。

開店の準備中、レオンの傍らには小さなアシスタントがいた。身体は小さいが、書店をやっていくには欠かせないパートナーだ。自らの文学嗜好を持ち、時に頑固だが詩集セクションにある大きなラジエーター・ヒーターの上でうたた寝をしている時を除けば、喜んで助言を与える相棒だ。

白い髭を蓄えたこの完璧な相棒は、アーチボルドという気高さが漂う名前と呼ばれている。

その日、著名なアーチボルドも街に漂う祝祭の雰囲気を感じていた。レオンが書店に足を踏み入れようとした瞬間、アーチボルドはパリの街を疾走する自転車乗りに匹敵するスピードで、積まれた本の間を



縫い、数冊の本を床に落としながら疾走した。

レオンはその様に全く動じず、「やあ、アーチャー」と声を掛けた。

「何か変わったことがあったのかい？」

アーチボルドは、レオンの足元に身体を擦りつけて返事をした。そして3回大きくジャンプをして、詩集コーナーのラジエーターの上という定位置に戻った。この場所は店内で最も快適であると同時に、「詩」と「パリの放浪」という2つの点で尊敬する、アポリネールのAとボードレールのBの棚の間にある最高の文学と共に過ごせる空間なのだ。

この位置からは、本の迷路を彷徨う人々を観察することもできる。彼の好物は、長ったらしいタイトルが付けられた分厚いエッセイ本のページをめくりながら眉間にしわを寄せる大人たち、または大海原での航海や騎士のロマンスを想像させる表紙の絵本を手にも空想に浸る子供たち。ただし、店内にいる人たちにアーチボルドが直接声を掛けることは滅多にない。特定の本やルネッサンス時代を代表する詩集を薦めたり、具体的な作風

の良さ、物語の魅力、さらにはイラストの色調について語りたくない訳では決してない。彼はこれら全てに対し、確固たる意見を持っているが、アドバイスは書店を訪れた人々の相手をするのが大好きなレオンに任せている。

アーチボルドは所詮、猫だから。

その日の朝、植物園の管理人であるムッシュ・バティスティが意思を感じさせる足取りでレオンの書店に足を踏み入れた時、アーチボルドはこの誉れ高きゲストに挨拶したい衝動に駆られた。険しい顔にゴマ塩の顎鬚を蓄え、ミッドナイトブルーの制服を纏ったこの人物が「物語と伝説」の棚に直行する中、想像力に事欠かないアーチボルドは『千夜一夜物語』から彼の大好きな一節を披露して、猫のシェーラザードのごとく、この揺るぎない意志をもった王様を魅了する自分を想像していた。

ゲストに声を掛けようとした瞬間、アーチボルドは極めて重要な物に注意を奪われてしまう。一瞬目に入ったその「物」には個性があり、クリスマスツリーにぶら下がっていた。

知っているような、目新しいようなその「物」は、この世に存在するどんな物語よりも、彼の猫としての本能を強力に刺激した。

その「物」とは、今朝レオンが店の前で拾い、何気なくツリーに飾った松ぼっくりだ。

アーチボルドのアーモンド型の目が、突き刺すように鋭く輝いた。制服姿の管理人、シェーラザード、その他を全て忘れ、彼は「ミステリー」の棚に飛び乗り、全速力でアート本に向けて走り、希少な革装丁の本を引っ掻きながらツリーに向かってジャンプし、獲物に向かって爪を延ばした。やった！獲物に手が届いた瞬間、松ぼっくりは枝からはずれ、放物線を描きながらカウンターのフレグランスキャンドルの上に落ち、溶けたワックスを周囲に飛び散らせた。キャンドルに落下した松ぼっくりのおかげで一瞬、キャンドルの火が消え、松ぼっくりはワックスまみれになってしまった。

ムッシュ・バティスティは思わず飛び上がったが、忠実なアシスタントのとっぴな行動に慣れているレオンは、キャンドルに再び火を灯し、松ぼっくりをツリーに戻し



た。その後、険しい顔つきの管理人に対し、最も丁寧な挨拶を試みた。

「私の猫が粗相をして失礼いたしました。今朝はちょっと気が立っているようで。本日は何をお探しでしょうか？」とレオンは笑顔で会話を始めた。

威厳が漂う濃色の制服を着たムッシュ・バティスティは厳格な口調で答えた。

「本当にお手伝いしていただけるといいのだがね。とある本を探しているのだが、本の内容は分からないし、本が存在するかどうかも定かではない」

ゴマ塩の顎鬚が地面に向かって伸びていくような様が彼の苦悩をさらに強調した。

「正直に申し上げますと、なぜここに来たのかも自分ではよく分からないのだ。失礼した、時間を無駄にしたくないのでね」

出口に向かって歩き出したムッシュ・バティスタは、さらに堅苦しい雰囲気醸し出していた。レオンはすぐさま「お待ちください！せめて、何をお探しなのか聞かせていただけないでしょうか？もしかしたら、ということもありますので」と引き留めた。

管理人は一瞬、決心が揺らいだように見えた。振り返り灰色の瞳でレオンを見つめながら、
「君の言う通りかもしれんな。世の中、何があるか分からない。では言おう。様々な物語をまとめた本を探している」

「物語の本ですか？」とレオン。「いやはや、それでしたらセクションをご用意しておりますので・・・」

「確かに物語の本だ。しかし大人を含む、万人を対象とした物語をまとめた本なのだ」

「なるほど、お求めの内容でしたらお探しできるかと思います」

「待て、まだ話は終わっておらん！物語には自然が登場する」

「はい」

「が、舞台は街だ」

「なるほど」

「どの街でもよい訳ではない。我々の近所、具体的にはパリ5区でなければならん！」

「あの・・・」レオンは徐々に落ち着きを失っていた。

「本の内容は現実的だが、魔法が登場する余地も必要だ。魅力的で、恐怖を抱かせないものがよい。喜びに溢れ、深みがあり、大きな絵本で・・・」

レオンは息を凝らして、管理人の具体的な要求を聞いていた。

「私の手のひらに収まるサイズだ」

ほんの数秒ではあるが、レオンは不安の迷路で迷子になった気分を味わった。この文学の方適式をどうやって解けばよいのだろうか？この不可能な本は実在するのだろうか？彼が最も嫌うのは、読み手を失望させることだ。彼にとって、読みたい本が見つからないことは、人生における最悪の出来事に匹敵する。パリ植物園の管理人は地域に根差した人物で威厳があり、厳粛で、ちょっと威圧的でもある。

レオンは全力で集中してあらゆる記憶を辿り、店内の全ての棚にある本を確認していった。もしかしてこれじゃないか？閃いた瞬間、彼は梯子に飛び乗って上の4段にまで登った。複数の本の山をどかし、身体をよじりながら暗い隅に腕を伸ばし、本を探した。そしてついに小さな本を手に取り、勝利を確信したかのように本を振った。手のひらにすっぽり収まるその本は、子供の頃に散策した森で拾った松ぼっくり、いや、今朝扉の前で拾った松ぼっくりのサイズだった。

レオンは梯子を下り、小さな本を管理人に渡した。難解な謎を解いた安堵感、そして達成感が身体に満ち溢れた。

管理人はポケットを探って金属製のグレーのフレームの眼鏡を取り出し、小さな本を丁寧に開き、眉間の皺をさらに深めながら声を出さずに読み始めた。探していた本かどうかを確認するために、レオンは管理人の表情を注視した。そして小さな奇跡が起きた。ページをめくるたびに、管理人の表情は徐々に柔らかくなっていった。

第1章を読み終わった管理人の顔には、数年来と思われるかすかな微笑みが浮かび、その表情は立派なゴマ塩の髭でも隠すことはできなかった。固唾をのんで管理人を見つめていたレオンは、管理人の顔にできたえくぼに、歓びを隠し切れない子供の表情を見た。

管理人は「よし、これだ」と言いながら、落ち着きを取り戻しているようだった。

「これならいいだろう。これをいただこう」

彼はそれ以上何も言わなかったが、小さな本が丁寧に包まれ、制服の前ポケットに収まり、重い靴の片方が店の外のアスファルトに置かれた瞬間、振り返ってレオンに対し、驚くほど若々しい声で「ありがとう!また来るよ。」と挨拶した。満面の笑みを浮かべ、目には歡びが宿り、厳しい表情が消え、実に親しみやすい顔つきになっていた。

スキップのような足取りで遠ざかっていく管理人を見つめながら、レオンはあまりの変化に戸惑いを隠せなかった。相棒のアーチボルドはというと、管理人の変化に驚かなかった。文学の魔力を知っているせいか、このような小さな変化には動じないのだ。クリスマスツリーの足元で銅像のように動かず、目を細めて集中するアーチボルドは、レオンが拾った松ぼっくりを忘れることができなかった。

ワックスがかかった松ぼっくりの鱗片は、不思議な、今までに見たことのない様相を呈していた。超自然の木の輪郭か、天使の顔か、隠されたメッセージなのか、アーチボルドは何かに似ているその「何か」に思いを巡らせていた。ツリーの周辺を何度か周り、あらゆる角度か

ら松ぼっくりを観察した。その後カウンターにジャンプして上り、松ぼっくりを眺めたが、答えは見つからなかった。疲れ果てたアーチボルドはラジエーターの上の定位置に戻り、尻尾を時計の振り子のように揺らし始めた。

「松ぼっくりの形は悲しいかな、人間の心よりも速く変化していく」

「とシャルルはかく語りき」(シャルルとは無論、シャルル・ボードレールのことだ)

そしてヴィクトル・ユゴー全集の前で身体を大きく延ばし、うとうと居眠りを始めた。

第2章

物事は時折、気付かれないほど僅かに変化する。
変化がもたらす新たなニュアンスを正確に捉えるには
人生を拡大鏡でのぞくか、詩人である必要がある。
さあ、拡大鏡を手に、詩的な感性を磨こうではないか！
現実は今、まさに変わろうとしている。
そう、私たちのすぐ目の前で。

翌日の朝、レオンは昨日同様、パリ植物園を通して自らの書店に向かった。街には昨日同様、この季節特有の高揚感が溢れていた。書店に入り、コーヒーを淹れ、アーチボードに挨拶をし、オーク材のカウンターの上のフレグランスキャンドルに火をつけた。ここまでは昨日と全く同じ流れだ。しかし、昨日とは何かが違っている。

レオンはガラス扉の真鍮のノブを回し、こよなく愛する本の洞窟に入って「何か」が違うことを察し、その「何か」

について考え続けた。

アーチボルドが、朝の挨拶に訪れた。いつも通りレオンのふくらはぎで背中を丸め、彼の足の間を縫って歩き、優しく「ニャー」と鳴く。その後、彼は文学的な散策を始める。今日は「哲学」の棚に飛び乗り、読書を通じて博識な前足をモンテーニュの本に置く。『随想録』からの1節は、アーチボルドに書店の猫としての教訓を教えてくれたー「私は踊るときは踊り、眠るときは眠る」。

スキップしながらライブニッツの本に移る。『人間知性新論』は、彼のきまぐれな精神とは相容れないらしい。尻尾が触れたイマヌエル・カントの『純粹理性批判』に関する記憶は、どちらかといえば朦朧としている。ジャンケレヴィッチのJの棚にたどり着くと、アーチボルドはやっと腰を下ろす。著書『何かあるものとほぼないもの』(The Certain-Something and the Almost-Nothing) は、詩人猫の魂に悦びをもたらし続けている。

その間、レオンは朝から「昨日と同じではほぼないもの」の原因となっている「何かあるもの」を特定しようとしていた。

誰も止められないホリデーシーズンの到来が、空気に
歓びのオーラを発しているのだろうか？

冬の朝特有の、強烈な朝陽だろうか？

それとも、いつもよりさらに落ち着きのないアーチボルド
なのだろうか？

あるいは本の迷宮に存在するピラミッドから何かが欠
けてしまい、全ての崩壊につながりかねない不均衡が
生じているのだろうか？

これらの質問が頭の中をぐるぐる回る中、レオンは仕事
を始めた。辞書の大きな山を運び、息を切らせながら
カウンターの上に乗せる。

その時、「何かあるもの」が正体を現した。最初は曖昧
な印象だったが、レオンが息を吸うと、その香りが鮮明
になった。樹脂、ウッド、松の葉が交じり合った謎の香り
が、彼の書店に漂っていたのだ。

この甘い香りの元を特定するのに、時間はかからなか
った。既にアーチボルドが香りの元の周りをぐるぐる歩
いており、その様子はまるで魅惑的な惑星の周囲を回
る衛星のようだ。香りの正体は、レオンがクリスマスツ

リーの枝に飾った小さな松ぼっくり。レオンはかがみ、猫の真似をして松ぼっくりに身体を近づけた。新たな天体の魅力的な引力は弱まらず、レオンは少しずつ、秘密の小道を辿るかのように松ぼっくりに近づいていった。

その瞬間、扉のベルが楽しそうに鳴り、レオンとアーチボルドは扉の方向を見上げた。葦のような人影は、すぐに本棚の間に消えていった。芳しい香りを放つ松ぼっくりの魅力的な光景から目を離し、レオンは立ち上がって謎の来店者に挨拶をしに向かったが、アーチボルドに先を越されてしまった。

しなやかな、踊るようなステップを踏み、猫特有の優美さを発揮して、アーチボルドは「外国文学」セクションの隅に隠れた新たな来店者の匂いを嗅ぎつけた。それは気弱で優しそうな若者で、分厚い前髪がその若々しい表情をしっかりと隠していた。

博識ゆえに、ほぼ全ての分野の専門家であるアーチボルドは、特に人間の本性を熟知していた。気弱な思春期の人間を怖がらせないためには、上手く立ち回る必



要がある。そのため、教養のある語り口で彼の大好きな詩の1つを朗読するという魅力的なアイデアを諦め、繊細で音のないアプローチを取ることにし、少年の側を何度も歩き、尻尾の先で足を触ることにした。

2人の居場所をつきとめたレオンが現れ、「こんにちは！何かお探しですか？」と声を掛けた。

声を掛けられた若者は、おびえた表情を浮かべた。レオンよ、お前はなんでそんなに不器用なのだ！とアーチボルドは思った。人間の心理が全く分かっていない！気の毒な若者が店を飛び出す前に、方針を転換するべきだ。

絶望的な状況では、思い切った手段が必要である、とアーチボルドは思った。彼はジャンプして棚に乗り、普通のペットのように可愛らしく跳ね回った。

若者は小さく微笑み、手を伸ばしてアーチボルドを撫でようとした。アーチボルドは若者腕の中に飛び込み、仕上げに喉をゴロゴロ鳴らした。この様子に、若者は笑い始めた。

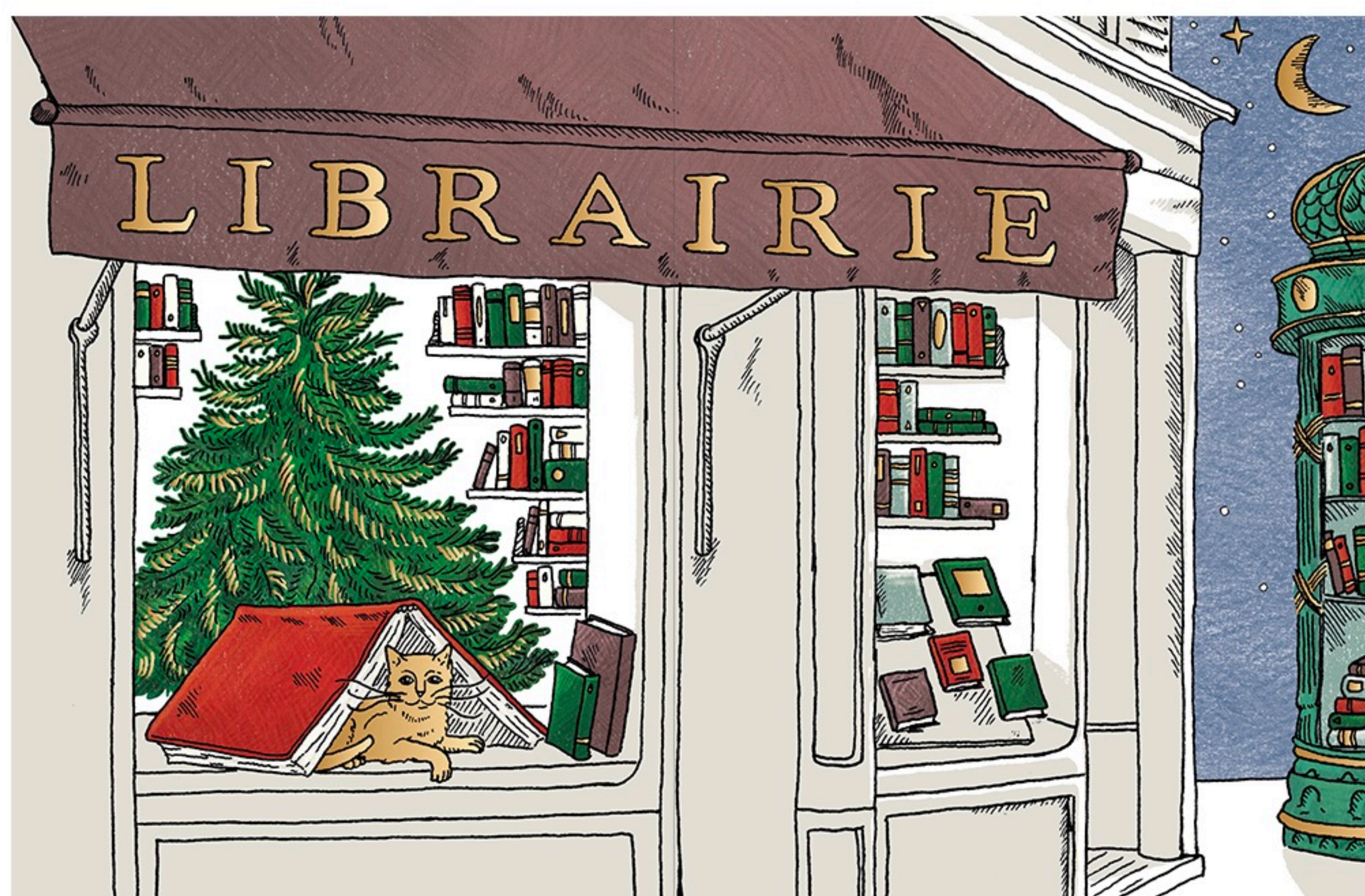
「彼はアーチボルド、そして僕はレオンと言います。何かありましたら、遠慮なく声を掛けてくださいね。もちろんゆっくりと本を見ていただいて構いませんよ」

少年は息を吐いて前髪をなびかせ、高音と低音が混じった声のトーンで早口に話し出した。

「僕はガスパール。本にあまり興味がないから本屋にはほとんど行かないんだけど、外を歩いている途中、店の中を覗いたらクリスマスツリーがあって、すごくいい香りを嗅いで、なぜだか分からないけど、どうしても店に入りたくなって。そういうこと。」

一息で話し終わったガスパールは息を整えて、「もう少しここにいてもいい?」と聞いた。

レオンはにっこりと笑い、好きなだけいてもいいよと答えた。その間、アーチボルドはこの愛すべきヒト科の生き物の読書愛を復活させる小説のリストを心の中で作っていた。



突然、魅力的なアトラクションがアーチボルドの注意を奪い、近くで見たいという抑えられない衝動を呼び起こした。数分の会話の最中、松ぼっくりが回りだし、魅力的な独自の輝きを放ち始めたのだ。

アーチボルドは大きく、優美なジャンプをして「映画」の棚に上り、「歴史」の棚で方向転換して、彼を魅了して止まない物体に飛びついた。これは太陽、それともゴールドの塊、それとも宝？彼は足で松ぼっくりを触り、回転スピードを上げた。

小さなミラーが無数に貼りつけられたディスコボールのように、松ぼっくりは周囲にゴールドの光を放ち始めた。光は「サイエンスフィクション」の棚の本を照らし、「旅行」の本棚で跳ね返り、「また来るね」と言いながらウキウキした足取りで店を出ようとしていたガスパールのフーディで止まった。

レオンとアーチボルドはその場に立ち尽くし、目の前で踊っているゴールドのきらめきを見つめながら、物思いにふけた。薄明りの中で軌道を描きながら回り続ける松ぼっくりが織りなすきらめく光景に、2人はすっか

り心を奪われてしまった。歴史上の多くの詩によって使い古された表現でなければ、そして辛口な文芸評論家同様、アーチボルドがありきたりな決まり文句を毛嫌いしていなければ、レオンとアーチボルドの目には「星が輝いていた」と書いただろう。決まり文句であろうがなかろうが、これは正確かつ光り輝く事実なのだから。

書店の何かが変わったことは、すでに疑う余地がなかった。その日以降、違いはどんどん明らかになっていった。松ぼっくりから漂う香りは日ごとに強まり、店内をまるやかなアロマで満たしていた。松ぼっくりの鱗片が開き始めると、ゴールドの輝きが徐々に増していった。ガスパールは毎日書店を訪れるようになり、行動も少しずつ大胆になっていった。本に関する質問を幾つかした後、彼はツリーの下にあぐらをかいて座り、松ぼっくりのゴールドの光の下で物語を読み耽った。

書店を頻繁に訪れるのは、ガスパールだけではなくかった。香りはすぐに近所まで広がり、そこからオステルリッツ橋、ひいてはセーヌ川の岸壁にまで広がるようになっていた。香りに魅了される通行人も増え、クリスマスツリーの香りにつられて書店に入り、たちまち松ぼっく

りが放つ輝きという魔法にかけられていった。

店内はまるでゴールドのパウダーが宙を舞う、虹色の空気が流れているようだった。棚に並べられた本のクリーム色がかった白いカバー、本を読む人たちの様々な色の上着、アーチボルドの毛、そしてレオンの栗色の髪、その全てが角度や光の当たり方によって色が変わって見える虹色に煌めいていた。

美しいものが大好きなアーチボルドは時折、ツリーに走り寄って前足で松ぼっくりを触り、新たな円形軌道を生み出した。今では来店者がレオンに対し、魔法のような香りの源、そして店内を輝かせる妖精のような光について質問する光景が当たり前になっていた。レオンにっこりと笑い、決まって、「それは私の猫に聞いてもらうのがいいでしょう。彼は私より多くのことを知っていますから」と返すのだった。

レオンより博識であることに自信を持っているアーチボルドは口を閉ざし、謎を謎のままとした。ある日の夕方、女性に起こされて説明を求められた時、彼はうっかり答えそうになったが、やはり口を閉ざしておくことにした。



落胆した女性は、「なんて不思議なんだろう」と言いながら店を去っていった。

アーチボルドは哲学的な思いにふけり、「美しいものは常に奇妙である、とシャルルはかく語りき」(シャルルとは無論、シャルル・ボードレールである)と呟いた。

その後、彼はエミリー・ディキンソン全集の前で身体を大きく伸ばし、昼寝を再開した。

第3章

ときに身体は完全に冷え切ってしまい、極度の冷えによって手足の感覚が失われる時がある。

そういう時は焚き火で全身を温めるか、キャンプファイヤーのように気持ちが燃え上がる歌を歌うのがよい。雪が降りだした今、無事に冬を乗り切るには火を灯し、最も熱いメロディーの歌を歌おうではないか。

いつものように、レオンがパリ植物園を通っていると、彼の明るい赤茶色の革靴が音もなく、柔らかい雪に沈んだ。歩くペースを落とし、滑らないように一步一步、足をしっかりと上げて、注意深く雪を踏みしめていく。

初めて月面を歩く宇宙飛行士、または新たな振り付けを学んでいるバレエダンサーのように。

視線を上げ、顔面にはらはらと落ちてくる雪のかけらを楽しみながら、レオンはパリの街を横切っていた。昨晚から降り始めた雪は、止む気配が全くなかった。

降り続く雪は植物園を横切る直線の道を占拠し、セーヌ川岸壁の石の色を和らげ、アスファルトの歩道やグレーの屋根、自動車のメタリックブルー、ごみ箱やリサイクルボックスのグリーンとイエロー、さらにはジョギングを楽しむ人々の蛍光色のウェアまでを白で覆っていた。日常の光景の一部となっているこれらの色は、子供たちが景観を覆ってしまった雪で作った雪玉のせいで所々見える程度になっていた。

雪をかぶってふっくらとしたシルエットになった物、車の窓ガラスに指でかけられた誰かの似顔絵、木の枝にぶらさがった雲のような形の雪。今朝、レオンの目の前には、魔法にかけられたパリの街が広がっていた。耳を澄まし、喜びに輝く目を大きく見開き、通りを包み込む静けさ、そして道行く人の顔の写真を撮りたくなった。道行く人々は老いも若きも、第二の子供時代に突入したかのように、あるいは喜びに満ちた無邪気さを再発見したような、輝くような笑顔だった。まるで今宵の祝宴に引力で引き寄せられ、街を歩いているようだ。あと数時間すると、1年で最も魔法のような夜が訪れる。

書店に到着すると、レオンは雪まみれのドアマットで靴底を拭いた。ガラスの扉越しに、今までで最も光輝く松ぼっくりの煌めく光の線が見えた。書店に入り、その場で目を閉じて佇む。ツリーの放つデリケートな香りも、昨日よりさらに強く、より繊細になっていた。突然、レオンに会えた嬉しさを抑えきれないアーチボルドが、彼の腕の中に飛び込んで来た。非常に控えめな性格のこの猫がこのような愛情表現をするまでには、数年はかかった。アーチボルドにも、二度目の子供時代が訪れたのだろうか？レオンが彼のお腹を撫でようとすると、気高いアーチボルドは我を取り戻し、身体を捻って素早く逃げ出した。

レオンは、カウンターのフレグランスキャンドルに灯りをともした。アーチボルドが店内を小走りに動く様を見ながら、新たな炎が店内を飛んでいるような印象を受けた。松ぼっくりのように、アーチボルドの毛はゴールドに輝き、「若い読者向け」の棚に向かって光を放っていた。彼にとって、「若い読者向け」というジャンルは不条理そのものだ。彼は大人の猫ではあるが、『ピーターパン』からは空を飛ぶ方法、『宝島』からは海賊と生魚への愛を学び、これらの著書は大切な財産となってい



る。『三銃士』の冒険は、彼にネズミ、松ぼっくり、枢機卿の親衛隊のメンバーと対峙した時の、騎乗での勇敢な戦い方を伝授してくれた。まるで思いがけずに作者に敬意を示すように、横滑りしたアーチボルドは、アレクサンドル・デュマの著書を倒した。

「一人は皆のために、皆は一人のために！」その日は雪合戦のようにあっという間に時間が経ち、空中には賑わいと喧騒が漂っていた。街中を散策する人々が急ぎ足で書店を訪れ、至福の表情で店内の雰囲気を読み込む。雪がついたコートのまま、誰もが好奇心に溢れた表情で店内を見まわし、魅惑的な香りとゴールドの輝きの光景に魅了された。ギフト用、または自分用の本を選び、レオンは差し出された本を、一流の剣士のような鮮やかな手つきでラッピングした。ダルタニアンよりも誇り高いアーチボルドは、ツリーの周囲をぐるぐると駆け巡り、彼の周辺で踊る、女王陛下のダイヤモンドのような輝きをつかまえるために、棚から棚へと動き回った。

外ではまだ雪が渦巻き、店内の窓からは飲み物やギフトを抱え、今宵の祝宴に足早に向かう人々が見えた。1日が足早に過ぎ、書店を訪れた人々は一人ずつ、祝祭

を心待ちにする笑顔で店を後にし、必ず最後に店内を振り返るのだった。そして本のラッピングが終わり、最後の来店者がドアベルを鳴らして出て行った後、店内はレオンとアーチボルドだけになった。静けさを取り戻した書店にて、ゴールドの鱗片を纏った松ぼっくりがツリーの中心で静かに回転し、彼らだけの特別なホリデーの風景を作り出していた。夕暮れが迫る中、松ぼっくりはさらに輝きを増しているように見えた。レオンとアーチボルドは言葉を発することなく、その光景を眺め、それぞれが物思いに耽っていた。

その時、蛍光色の光が店内を走り、静けさを破った。ジョギングウェアを来た女性が、まるで早い自動車のようなスピードで店内に突入したのだ。レオンが毎朝、植物園を違って書店にやってくる時に見かけるランナーの一人だった。

「ごめんなさい、まだ空いています？」

突然、店内に緊張が走った。女性はレオンの答えを待たず、小走りで店内の棚を見て回った。

「実は初めてなんですけど、素晴らしい香りがしたものですから、つい・・・」

レオンとアーチボルドの反応を待たずに、女性は店内の通路を足早に歩き回りだした。アーチボルドはお気に入りの場所から降りて、女性に挨拶をしに行った。彼よりも落ち着きのない人間が、彼がお気に入りの場所でそわそわする事は稀だ。松ぼっくりのブロンズ色の煌めきを眺めながら、女性はその場でクルクルと回りだした。

「本はほとんど読まないのよね、いつも時間がなくて。でもこの香り、そして光はすさまじく美しいわ!」

女性が来店して以来、軽い眩暈を感じていたレオンは、女性に座って何か飲みませんか、と語りかけた。

「カフェインレス・コーヒー、あるいはバーベナ・ティーはいかがですか？」

息を切らしている女性にとって、座ってのんびりお茶を飲む好意は性に合わなかった。

さらに今宵は祝祭のため、女性はジョギングを終え、祝宴用の買い物をして家に帰り、母親に電話をした後、服を着替え、その後も色々とやることがあるはずだが、女性は突如、小走りを止めた。歩きながら、彼女は店内の空気を、深く吸い込みながら、呼吸を整えるごとに、むしろ激しく息をしていた。

その時、奇跡が起きた!彼女は座り、突如として訪れた、リラックスしたリズムに驚きを隠せなかった。今までに知ることができなかった歩調を突然、発見したかのように。

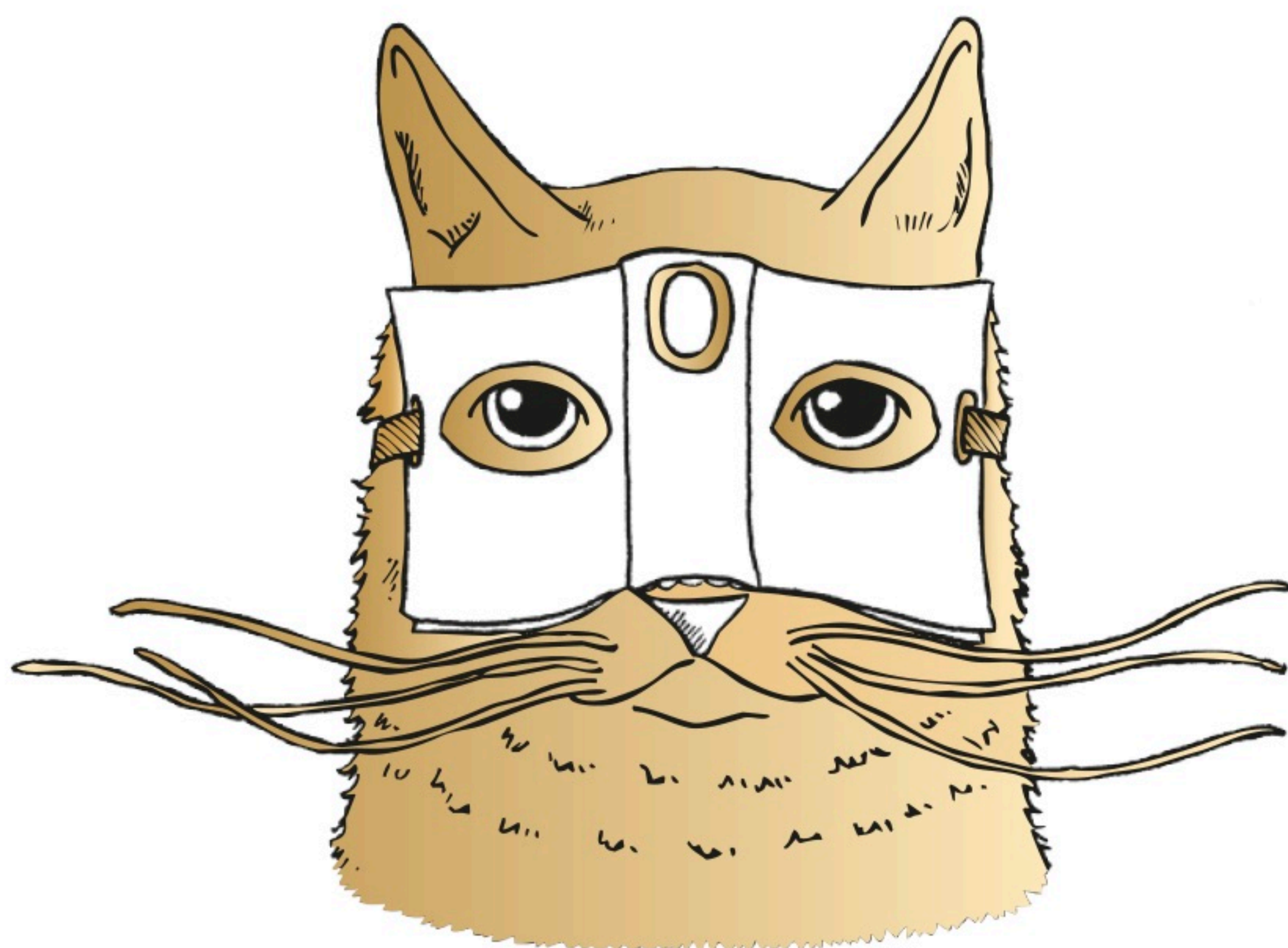
「ここにはものすごい数の本があるのね、すごい!」
女性 は 巨大な本棚を見上げながら話した。アーチボルドは飛び跳ねて、彼女の足元に着地した。
「僕の猫がすいません、お客様を個人的な店内ツアーにご案内することが大好きなもので。彼の名前はアーチボルド、僕はレオンと言います」
レオンは女性に淹れ立ての熱いお茶を差し出した。
「アイリスよ。はじめまして、アンシャンテ」

アイリスが書店を訪れて以来、アーチボルドはやっと落ち着いた彼女にお薦めする本を考えていた。彼にとって、彼女は『不思議の国のアリス』のうさぎを想起させる人物だ。彼女がこの本を読んだとき、自分はどうさぎのようだと認識できるだろうか?怠惰のありとあらゆるパターンを熟知するアーチボルドにとって、彼女は極めて複雑なケースだ。本の文章を読む速度よりも速く動く人間に対して、どんな本を薦めたらよいのだろうか?何かを

追いかけている時、どうやってストーリーに没入して追いかけているものを忘れさせることができるだろうか？このような質問を自らに投げかけながら、アーチボルドは彼が知る中で最も濃く、最も強力な物語、フェリックス・フェネオン作『三行小説』の上に前足を乗せた。そして、瞑想の繊細な味わいを思い出すために、お気に入りのラジエーターの上で時折楽しんでいる、俳句本の大コレクションを尻尾で撫でた。レオンも詩集を数冊手に取り、何気なくアイリスの前に置いた。

「そろそろ閉店時間ですが、ごゆっくりしていただいて結構ですよ。私たちにとって、本とは人生を通じて楽しむものですから」

植物園でのジョギングを日課とするアイリスは、走るのを止め、レオンが入れた熱いお茶をすすりながら、無意識に目の前に置かれた本の1冊を開いた。詩集を読み始め、ページをめくるたびに出会った詩、そのイメージ、ストーリー、リズムを心に根付かせていった。無意識な彼女の中で、時はすっかりその姿を消してしまった。



100年、あるいは数分後、穏やかだった時間が突然終了した。入口の扉のベルが賑やかに鳴り、ガスパールの顔が現れ、そのほぼ真後ろにムッシュ・バティスティの顔が現れた。ムッシュ・バティスティは笑顔で、数日前にレオンから薦められた物語について、早急に話をしたいと言った。ガスパールは内緒の人にあげる、内緒の本を探しに来たようだ。

「ご存じかもしれませんが、こちらはアイリス。よく植物園でジョギングしていますよ」

静かな図書館は、今や魔法がかけられたように、書店に集まってきた人たちの会話ですっかり賑やかになっていた。ほんの少し袖がすり合った同士が、まるで数年来の知り合いのように会話を楽しんでいる。パリが村となり、レオンの書店は村人の活動の中心地となってしまったようだ。誰も経験したことのない香りが、予期せぬ祝宴という演出を施している。アーチボルドも、書店に訪れた歓びの輪に入りたがっていた（あるいは、知識をひけらかしたかったのかも知れない）。人のエネルギーという落雷に打たれ、アーチボルドはお気に入りの場所から「地理」の本棚へとジャンプし、床をスライディングしながら松ぼっくりに飛びついた。

まるで楽しそうに始まりの合図を鳴らすかのように。

彼の歡び、その結果として繰り広げられた猫パンチがあまりにも強力だったため、ツリーから松ぼっくりが落ちてしまった。松ぼっくりはカウンターにゴールドの跡を残して跳ね返り、床の上を転がって店の外に向かい、ドアマットの真ん中で止まった。

レオン、ムッシュ・バティスティ、ガスパール、そしてアイリスの会話が一瞬静まり、全員がまるで激しいテニスのラリーを観戦しているかのように、目で松ぼっくりの行方を追った。ゲーム、セット、マッチ。松ぼっくりは1週間前、レオンが発見した場所に舞い戻った。

レオンが松ぼっくりを発見した朝同様、松ぼっくりは彼らがやって来るのを待っているようだった。レオンはドアマットに向かって歩き出し、会話が弾んでいた店内は水を打ったように静かになった。夜が帳を下ろし、店の外ではなぜか街頭が全て消えていた。暗闇に覆われたパリの街で、松ぼっくりだけが燦然と輝いていた。

ドアマットの前でレオンはかがみ、松ぼっくりを拾い、ロングコートのポケットに入れた。もしこの場にアイリス、アーチボルド、ムッシュ・バティスティ、そしてガスパールがいなかったら、彼らがレオン同様、信じられないという表情を浮かべていなかったら、レオンは「これは全て夢だ」と思っただろう。「複数の人が同時に、同じ夢を見ることは可能なんだろうか？」とレオンは自問した。「これこそが、哲学者の言うところの現実なんじゃないか？」アーチボルドならそう答えたかもしれないが、言葉のやりとりはなく、崇高な哲学的思考に耽る瞬間は訪れなかった。なぜなら書店の外には、その場にいた全員が目を疑う光景が広がっていたからだ。

パリの街の木々がすべて、巨大なモミの木と化していたのだ。

まるでノルウェーの森からやってきたような木々が、突然パリの街中の車や街灯の間から姿を現し、石造りの建物の高さにまで伸びていた。この光景に心を奪われたレオンとその友人たちは、道路の真ん中を歩き始めた。誰もいない、不思議な世界で、パリはモミの木の香りが充満した、森化していた。降り立ての雪を踏みしめ



ながら、星空を眺めていると、森が真っ暗になった。振り返った瞬間、次の角にアーチボルドのシルエットが雪上で光り輝いていた。彼の毛はゴールドの輝きを放ち、まるで海原で揺られる灯台船のように、周囲を照らしながらパリの街を歩いていた。レオンとその友人たちは、この特別な、光り輝く猫の足取りを追って、夜の散策を開始した。

周りを見渡すと、全てが同じであると同時に異なり、知っているようで新しかった。歩き慣れた近所の通りのはずなのに、誰もがなぜか認識できなかった。懐中電灯のように周囲を明るくするアーチボルドのゴールドの輝きを追い、アーチボルドの先導に従って木々の下に到着した。4人と猫1匹はほとんど会話をせず、冬の夜の冷たい風を頬に感じながら、歓びに溢れた不思議な行列を作っていた。

パリ植物園のゲートに沿ってセーヌ川へと進み、サン・ベルナール河岸を經由してシュリー橋へ。橋から見るサン＝ルイ島の先端は、氷の中を進む巨大な船の船首のようだ。右側の遠くでは、バスティーユ広場の7月革命記念柱の頂に立つゴールドのバスティーユの精霊が、



雪舞う中その炎を掲げていた。左を見ると、雪をかぶったノートルダム寺院の塔が森の上にそびえ、まるで2つの岩場の峰のようだ。

サンジェルマン大通りから、巨大なモミの木に囲まれたモベール広場へと戻ると、この広場はパリ中心部に突如姿を現した空き地のようになっていた。エコール通りを歩き、ソルボンヌ大学の高窓に到着。そこからまるでアルプスの大山塊への道を登るかのように、アーチボルドはパンテオンへと続く、モンターニュ・サント＝ジュヌヴィエーヴの細い通りに入る。広場に到着すると、行列は古い寺院を周回しながら、興味津々な目をリュクサンブール公園へと向ける。星が輝く真っ黒な空の下、このパリの公園は黒い森のように見える。

その後、魔法がかけられたように時が止まった瞬間が記憶と化した時、行列の誰一人として散策にかかった時間を思い出せなかった。時は淡々と経過し、知らない間に幸せな瞬間が過ぎていった。彼らが確実に覚えているのは、とあるタイミングで寒さによる疲れに襲われ皆がホリデーのディナーを思い出したこと。アーチボルドの光り輝く足取りは、レオンが住んでいるアパルトマ



ンへと向かった。レオンは、雪をかぶった屋根に近い自分の部屋を指し、「せっかくなので、一緒にお祝いしませんか?」と言った。

彼のワクワクした声のトーンから、これはお伺いではなく、お誘いであることは明らかだった。階段を上り、彼の部屋に入ると、皆を歓迎するような暖かさに包まれた。部屋の各隅には本が置かれ、焼き立てのパンとお祝いの準備が整っていた。アイリスの腕に飛び込んだアーチボルドは、大好きなギョーム（無論、ギョーム・アポリネールである）のお気に入りの子守歌を密かに詠んでいた。

「不安よ おお 僕のよろこび/君と僕とはいっしょにゆく/
ザリガニが歩くように/後へ 後へと。」

第4章

人生は、時に思いがけない道筋を辿ることがある。
迷子にならないためには、複雑な地図の書き方、あるいは最も巧妙な語り手のように、物語のあちこちに小石を撒いておく必要がある。
それでは色鉛筆を手に取り、大きな地図を開き、今までで最も驚きに満ちた物語を思い出そう。
この物語はそろそろ最後の交差点に差し掛かり、終わりを迎えるのだから。

その日の朝、レオンはアーチボルドを抱えて歩いていた。アーチボルドも、レオンに抱えられることに満足しているようだった。

「幸せな気分とは、良いものだ」とアーチボルドは心の中で呟いた。彼のこの一言は、いつものようにギョーム(アポリネール)、またはシャルル(ボードレール)からの

借り物ではなく、あらゆる才能が備わっているアーチャー（ボルド）による創作だった。昼の光の中、何度でも見たい幸せな夢のように、昨晚の出来事は彼らに非現実的な「モミの木の香りに包まれた夢」というイメージを残した。

昨晚までパリ全体を渦巻いていた雪は止み、雪が残った歩道を人々が歩いていた。まるで日常が舞い戻ったかのように。

その日、レオンとアーチボルドが辿った道を地図で確認するとしたら、意味やロジックを見つけることはかなり困難だっただろう。広場を横切ってヴァレット通りに入り、右折、左折、再び右折、左折、これを何度か繰り返し、彼らはセーヌ川に辿りついた。

「そろそろ書店に戻って、熱いコーヒーでも淹れようか」
レオンのこの問いかけに、アーチボルドは何も答えなかった。彼は再び眠りに落ちていたのだ。

レオンが無言で探していた光景は、本当にどこにもなかった。昨晚目にしたモミの木の森は、その天蓋を彼の

記憶の四隅、そしてパリの通り、全ての広場、公園、庭園に広げたが、その姿はもう見当たらなかった。

星の光によって拡大されたような、雄大な針葉樹の木々の代わりにプラタナス、菩提樹、栗の木がおとなしく、平凡に佇み、葉が落ちた枝が灰色の空に向かって伸びていた。モミの木の影響も形も無く、存在自体が蒸発したようだ。アーチボルドの毛にはまだ、ゴールドの輝きがごく僅かに残されていたが、昨晚の炎のような輝きはすっかり失われていた。レオンはまだ雪が残った歩道を歩き回り、昨晚の光景を探し続けたが、松ぼっくりや松葉はどこにもなかった。まるで昨晚のパリが、いつものパリに戻ってしまったように、森は再び、ただの街になった。

昨晚の光景は、集団幻覚だったのだろうか？街を歩く人々をよく見ると、茫然としているのは彼だけではないことが分かった。すれ違った何人かの眉毛の上には混乱によって生じた皺ができており、中には額にまで皺が刻まれた人もいた。樹脂の香りのみが残され、通りに充満し、懐疑的な通行人たちが顔を上げ、匂いを確認した。この香りこそ、昨晚の不思議な夢が現実だったこと

の証拠ではないか？最初に暗記した詩を思い出しながら、レオンは思わず、「時折、不思議で印象的な夢を見ることがある」と呟いた。

「それは私が愛する見慣れない街の夢で、その街も私のことを愛している」とアーチボルドは心の中で続けた。彼が自らの前足の裏のごとく知り尽くしている、敬愛するポール（ヴェルレーヌ）の一節をちょっと変えたものだったが。

書店に近づきながら、レオンは反射的に小さな松ぼっくりを指で挟み、回転させた。ゴールドで甘い香りのする、この特別な松ぼっくりは、お守りのように彼のポケットの奥に収まっていた。これからは何が起きてもおかしくない、何が起きても驚かないだろうな、とレオンは思った。次の角に、おとぎ話に登場するドラゴンが姿を現しても？自然博物館の恐竜たちに命が宿り、歌いだしたとしても？住んでいるアパートマンが一夜のうちに、ヘンゼルとグレーテルのお菓子の家に変身しても？これから歩いていく道のりにおいて、次の角にはどんな冒険が待ち受けているのだろうか？今日、書店のドアマットにはどんな驚きが待っているのだろうか？

ドアマットの上には何も置かれていなかったが、その日の朝、レオンとアーチボルドにはサプライズが用意されていた。笑顔のアイリス、ガスパール、そしてムッシュ・バティスティがショップウィンドウの前で2人を待っていたのだ。

昨晚のお祝いの後、この3人は密かに集まって、翌朝レオンを驚かそうと約束していた。アーチボルドは愛嬌たっぷりにニャーと鳴き、レオンは扉の鍵を回して、読書好きの友人たちを従えて、注意深く店内に足を踏み入れた。書店はまだ眠りについており、本は閉じられたままで、賑やかな場所が閉まった後のように、静かで厳かだった。昨晚、店を出た後の状態が保たれており、フレグランスキャンドルはワックスが飛び散ったカウンターの上に置かれ、整理整頓された蜂蜜色の本棚、いつ崩れてもおかしくない本の山が皆を待ち受けていた。大好きな遊び場兼読書場に戻ってきたアーチボルドは、レオンの腕の中から飛び降り、ラジエーターの上へと一目散に走っていった。

大きなチョコレートの箱から好みのチョコレートを選ぶように、アイリス、ガスパール、ムッシュ・バティスティ



が本の背に触れながら読む本を物色する間、レオンはポケットから松ぼっくりを取り出し、そっとカウンターの上に置いた。昨晚の輝きは失われたが、つや消しの鱗片はゴールドになっていた。レオンはコーヒーマーカーへと歩き、口笛でヴィヴァルディとビートルズを足して2で割ったような曲を吹いた。

交響曲のような彼の口笛は突然、レオンが床にぱったり倒れて終了した。長年、アーチボルドの落下を受け止めてきたことが幸いし、怪我はなかった。ラジエーターの上で一部始終を見ていたアーチボルドはニャーと鳴き、自分よりもしなやかさ、優雅さに劣る人間との連帯感を表現した。

レオンは寄木張りの床の突起につまずいたのだった。しかし、彼は書店の全てを把握しており、霧深く、暗い夜に目隠しをして店内を歩いても、絶対に本の山にぶつからない自信があった。この突起は、昨晚はなかったとレオンは確信した。彼はかがみ、つまずきの原因となった床の突起に掌を当てた。木製の蛇のようにオーバルの形で滑らかなその突起はクリスマスツリーから数メートル離れた場所で発生し、木の幹に近づくほど厚み

を増していた。

当惑したレオンは立ち上がり、ツリーを上から下までよく観察した結果、事の全容が明らかになった。ツリーの根が書店の店内で育ち、まるで流れ星の尾のように、彼の周りで広がっていたのだ。根は寄木に到達し、自らを刻み込み、一体化していた。まるでツリーが数年前に植えられ、時間をかけて根を張ったかのように。ツリーは書店の一部となり、本の山の森にかこまれた、中心地のようだった。

その日の朝、これからは何が起きても驚かないとレオンは思ったが、その考えは間違っていた。この新たな驚異を目の当たりにし、彼は目を見開き、その場に立ち尽くした。

「コーヒーはいかがかな？」

ムッシュ・バティスティはこの光景に動じることなく、棚から自ら選んだ本の山をカウンターの上に置いた。その際、ムッシュがツリーの枝に触れ、山の一番上にある本の上に、ワックスが1滴垂れた。管理人は前かがみになり、ワックスが垂れた本を顔に近づけると、全員が覚



えている香りが漂った。

それは昨晚の白日夢で漂っていた、冬の夜のモミの木の香り、パリの中心部にできた夢い森の香りだった。

勘の鋭いアーチボルドは、何か重要なことが起きると察知した。先を越されないよう、彼はラジエーターの上から前触れなく、カウンターの上に飛び乗った。本の山を倒しそうになり、つまずいたが、威厳をもって身のこなしを修正し、ツリーへとジャンプした。ジャンプによりゴールドで香りのついたワックスの無数の滴が降り注ぎ、ツリーの枝に落ちた。再び、書店に魔法の瞬間が訪れ、アーチボルドは自らの行動に満足した。カウンターから大人しく降り、カメラの前で演技する映画スターのごとく、後ろを振り返らずにその場から立ち去った。

本の表紙に垂れた輝くワックスを眺めていたレオンは、突然閃いた。3人の友人が見守る中、新たなエネルギーに突き動かされたレオンは、静かに本棚の間を歩き始めた。梯子に上り、あちこちへと動き、本の山を手に戻ってきた。これらの本は、彼が最も大切に思い、大人になってからの想像力を養い、子供の頃の夜のお供として

文字や感情、生き方や考え方を教えてくれ、そして何よりも、全ての本 - 愛に関するもの、科学、冒険やワクワク、つまらない本から楽しめる本まで、全ての本に対する情熱を呼び起こしてくれた。

最も大切な永遠の友人、果てしない情熱をかけるもの、大勢の人と共有しても情熱を失わない存在にしてくれた、大切な本たちだ。

子供の頃に遊びで行った儀式のように、真剣で厳かな即興の儀式で、レオンはワックスの滴を次々と運んできた本に移していった。ジョルジュ・ペロス作『ある平凡な人生』、フレデリック・ベルテ作『Daimler s'en va』、そしてナボコフ作『アーダ』。

それは人間と文学を結ぶ、モミの木の甘い香りのする、魔法の約束を永遠に封印することを意味した。いつも口出しをするアーチボルドは、ややムツとしていた。彼の見解では、猫たちも人間同様、文学と深く結びついている。彼は魔法のシールを、彼がこよなく愛するシャルル(ボードレール)の『悪の華』、親愛なるギョーム(アポリネール)の『アルコール』に押すよう、せがんだ。

ムッシュ・バティスティは、レオンが8日前に薦めて以来常に携帯している小さなパリの物語の絵本をポケットから出した。植物園の道より長い文章を読むことに慣れてきたアイリスは、マルセル・ブルーストの『見出された時』を選んだ。ガスパールが差し出した、J.D.サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』の最初の数ページは、数日前にクリスマスツリーの下であぐらをかいて読んだもので、既に彼の人生に影響を与える兆しがあった。

その日以来、レオンが（近所に住む友人たちがやって来た時は、彼らに手伝ってもらいながら）本を包んで新たな持ち主に渡すたびに、必ず素晴らしい香りのするワックスでシールを押している。小さな松ぼっくり、モミの木の下で過ごした冬の夜、魔法の約束、そして書店内の森の記念として。

この物語を読んでいるあなたがもし、この書店を訪れるとしたら、購入した本に押された香り付きのワックスを指先で感じるができるかもしれない。店主のレオンにワックスを押す理由を尋ねたら、彼の答えは必ず「僕の猫のアーチボルドに聞いてください。僕よりも、彼の方がはるかに物知りですから」と想像できるだろう。

もしアーチボルドがラジエーターの上で気持ちよさそうに寝ていなければ、そして、もし長くて白い髭を蓄えたこの賢人を起こす勇気があり、彼が恐れ多くも答えてあなたが彼の言葉に耳を傾ける方法を知っているのなら、彼の明白な説明を授かることができるだろう。

「単純なことですよ。本のごとく、ワックスは夢でできているのです」

こう言って、アーチボルドはウィリアム（無論、ウィリアム・シェイクスピアである）全集の前で身体を大きく伸ばし、眠りへと戻っていくだろう。

